

近代からはじまる北海道と和紙産地の絆

その1 サビタ樹皮の採取とサビタ糊の製造

錦織正智

はじめに

明治 2 年 (1869)、新政府は蝦夷地に開拓使を置き、名称を北海道に改めました。近代化を急ぐ新政府は北海道の本格的な開拓に着手し、漁労と狩猟が主な産業であった蝦夷地に豊富な天然資源を求めました。

山野から得る天然資源は日本の近代化に大きく貢献しました。良質な石炭は国内で確保できる貴重なエネルギー源になりました。火薬などの原料になる硫黄を産する古武井硫黄鉱山 (恵山町) は東洋一の生産規模を誇りました。森林から伐り出す大量の木材は鉄道敷設の枕木にも使われました。このような国力増強と士族の授産に直結する資源開発は欧米の文化と技術を積極的に取り入れた開拓使が手掛けました。

他方「いつ?」「どこで?」「誰が?」「どのように?」事のはじまりが不明瞭な資源開発もありました。そのひとつが北海道ではサビタと呼ばれるノリウツギの採取事業です。ノリウツギは昔から紙漉 (す) きに使われる原料でした。明治末期に道外への出荷が始まると、和紙職人は道産ノリウツギの品質を高く評価しました。以来、北海道はノリウツギの供給地となり、和紙の生産を 100 年以上支え続けています。

ノリウツギ (学名: *Hydrangea paniculata*) は夏季に白い花が咲くアジサイの仲間です (写真-1)。北海道から九州まで全国に自生していることから、地方名 (方言) があります。方言を拾ってみると、北海道から青森 (津軽地方)、秋田 (鹿角、山本、仙北)、岩手 (岩手、九戸) に掛けてはサビタと呼ばれています。その他、トロロノキ (奈良大和地方)、ネリ (宮城)、ネリギ (宮城、山形)、ノリギ (高知、徳島)、ノリノキ (群馬、栃木、愛知) など「ネバネバするもの」を表す呼び名が多いことに気が付きます。これは樹皮に含まれる樹液の性状に由来しています (写真-2)。



写真-1 ノリウツギ (7月)

和紙に関する書籍に目を通すと、中国から日本へ紙がもたらされたのは 4, 5 世紀の頃です。大陸から伝わった抄紙技術が国内で伝播・伝承される過程で原料に使う繊維植物の取捨選択が繰り返されました。やがて、コウゾやミツマタ、ガンピが使われるようになりました。抄紙技術にも工夫が重ねられました。そして、紙を漉くときに植物由来の粘液 (抄紙用粘剤) を使うようになりました。製紙業では抄紙用粘剤を「ネリ」「糊」と呼びます (写真-2)。ネリはノリウツギの樹皮やトロロアオイの根から抽出します。それぞれのネリは特性が異なることから、季節や用途で使い分けられます。ネリが持つ「粘り」の効用は水を張った漉き舟の中でコウゾやミツマタの繊維が沈殿することを防ぎ、均等に分散することを助けます (写真-3)。また、繊維同士をよく絡ませることができるようにも

なりました。ネリを使うことで生産性が向上し、丈夫な紙や薄い紙の生産を実現しました。



写真-2 ノリウツギ樹皮（左）から抽出したネリ（右）

写真-3 ネリを加えた漉き舟
の Kouzo 繊維

本稿では北海道がノリウツギの産地に至った経緯を紐解きます。古い記録をたどることから、参考にする資料に合わせて「ノリウツギ」と「サビタ」の両者を同じ意味で使うことにします。

江戸末期～明治中期：北海道における和紙生産の試みとノリウツギの認識

短い期間ですが江戸時代の蝦夷地にも製紙業が興りました。史料に残る紙を漉いた最も古い人物は明治維新が近い安政 3 年（1856）に江戸から函館へ移住した御家人の鈴木主一郎です。主一郎は現在も地名が残る谷地頭で駿河と甲斐からミツマタの皮を取り寄せて、わずかな量の紙を漉きました（写真-4）。江戸からミツマタの種子を取り寄せて、谷地頭の開墾地で栽培する計画も立てましたが、主一郎は亡くなり叶いませんでした。ただ函館では、主一郎が移り住む以前からミツマタ栽培が行われていました。松前史によれば、享和元年（1801）に苗畑を設け、スギとともにミツマタとコウゾを 1 万株ほど養成した記録が残されています。この栽培が試みで終わったのか、紙を漉いたのか、それとも北前船で本州へ出荷したのかは明らかにはできませんでした。



写真-4 コウゾ（左）とミツマタ（中、右）

明治時代になると、開拓使は明治 4 年（1871）から、和紙を含む 24 業種（味噌、塩、しょうゆ、農具、菜種油、甜菜糖、鮭鱒缶詰、ビールなど）に関わる 31 の工場を次々に

建設しました。開拓使が初めて製紙に着手した場所は函館に近い現在の七飯町。西洋式農業の普及を目的に設置した試験農園「七重官園」です。当初「七重開墾場」と呼ばれた場内に石州津和野（現・島根県鹿足郡津和野町）から取り寄せたコウゾ苗を栽培し、明治5年から製紙事業を始めました。続く明治6年には札幌製紙場を設置し、自生する野生の桑で「桑皮紙」を試作しましたが、失敗に終わっています。道外からコウゾの皮を取り寄せたり、秋田県からコウゾの苗木を取り寄せて栽培したりしましたが、採算は合いませんでした。その後、北海道は木材パルプを原料にする洋紙の生産へ方向転換しました。

このように松前藩と開拓使が手掛けた製紙業の記録にコウゾとミツマタの話題は登場しますが、調べた範囲には「ネリ」が見当たりません。理由は分かりませんが、近隣に自生するノリウツギを労せず収穫して自足できたことが記録をおろそかにしたのではないかと推察しています。

道内の資料や文献にノリウツギに関する記述が増えるのは北海道庁が設置された以降です。明治19年（1886）に北海道庁が設置されると、北海道庁は原野を中心に植民地区画を設定して入植を進め、併せて「北海道移住案内」を作成しました（写真-5）。この冊子には入植者に貸し付ける土地の地図に加えて「気候」「土壌の様子」「飲用に使える水源の状況」「汽車・船・道路などの交通状況」「商店の状況」などが書かれています。この中に有用植物（樹木・山菜・薬用植物）の項もあり「サビタ」が含まれています。「北海道移住案内」の記述から、現在と比べて広い範囲に多くのノリウツギが繁茂していたことが分かります。

また、同時期に出版された植物資源をまとめた「北海道植物志料」では、サビタの項目に「内皮ヨリ製紙用ニ供スル糊ヲ製ス」と記載されています。

これらの資料から、明治期には全道的にノリウツギがかなりの量自生していたことと、役人も含めた多くの移住者がノリウツギの用途を認識していたことが想像できます。



写真-5 北海道移住案内
（国立国会図書館所蔵）

明治後期：和紙産地の資源の枯渇が道産サビタ樹皮に光を当てるきっかけに

国産の紙は飛鳥時代には普及しましたが、大変に貴重で大部分が写経に使われました。平安時代には貴族の間での手紙や文学作品（「枕草子」「源氏物語」）などの創作にも使われ、日本文化の発展に大きな役割を果たすようになりました。江戸時代になると雨傘や浮世絵、かわら版など庶民の生活にも浸透しました。江戸時代に紙が広く普及した背景には、藩が紙づくりを奨励し、産地を育成したことが挙げられます。紙は品質で蔵物（統制品）と納屋物（統制外）に分けられ、藩が専売する蔵物は藩財政を支えました。また、紙は米に代わる税でもあったため、紙漉きは農閑期の農家の副業となりました。

明治時代になると幕藩体制が崩壊したことで、紙の生産と流通に藩の保護がなくなりました。製紙を廃業する者も現れましたが、自主的な生産と販売体制を構築する産地や紙漉きを専業にする者も現れました。また、西洋の技術を取り入れた機械で漉く和紙の生産も始まりました。和紙の生産量は大正時代に最盛期を迎えるまで増加し続けました。

製紙環境の急激な変化は原料の需給に課題を生じさせました。生産量の増加にコウゾと

ミツマタは栽培面積の拡大で対応しましたが、問題はノリウツギです。ノリウツギは昔から近隣に自生しているものを採って自足していました。江戸時代までの家内制手工業規模の製紙業では、山野での収穫と自然再生が均衡していたのですが、早晩、天然資源が枯渇する可能性が出てきました。「土佐紙業界の恩人」「紙聖」とも称される吉井源太は著書「日本製紙論」の中でこの状況を次のように警告しました。

各地の山間に多く自生せり製紙盛大なる地方といえども、未だ栽培することなし、若し今日のごとく栽培増殖を計ることなくして採取に放任するときは他日各地一般に之れか欠乏を告ぐるに至る

明治末期：道南でサビタ樹皮の採取とサビタ糊製造が始まる

土佐でノリウツギ資源の枯渇が憂慮され始めた少し後のことです。北海道庁の広報雑誌「殖民公報」に「サビタ樹皮の利用」と題した記事が載りました（写真-6）。記事には次のように書かれています。

明治四十二年頃より函館より上磯郡茂別村に至り山野のサビタ樹皮を採取し漉紙糊原料として大阪神戸を經由し土佐に販出するものあり（後略）

これは北海道で事業的にノリウツギ樹皮の採取が「始まった年代」「始まった場所」を明記した数少ない資料の一つです。短い記事ですが収穫から出荷までの一連の過程に触れています。

まず収穫の仕方です。ノリウツギを地際から伐って、樹皮がついている材を搬出しました。一面のノリウツギを伐り尽くすと、別の土地へ移動しました。記事には茂別村當別と木古内村釜石で伐り尽くし、木古内村泉澤方面の収穫に着手したことが書かれています。伐採後の作業は分業されていて、材を運搬するのは「村民（おそらく男性）」、集積した材から樹皮を剥がす作業は「婦女子（婦人と子供？）」と書かれています。副業ではありましたが「地方の経済を助くること尠からず」とのことからも、収益も相応にあったことが想像できます。

集材した材から樹皮を剥いで、出荷するまでの工程は次のとおりです。まず材（材の長さ四尺（約 120cm）、末口径三寸（約 9cm））を平均 25 本用意します。これから採れる樹皮の全量を出荷まで続く工程の一単位として扱いました。材から樹皮を剥がしますが、商品になるのは外樹皮を取り除いた内樹皮です（写真-7）。四斗樽に笹の葉を敷き、そこに薬品（おそらく防腐剤）を散布して、内樹皮を詰め込み、密封して出荷しました。発送には全国的な航路網に組み込まれていた函館港を利用しました。

さて、この記事に「村民」とありますが、村の生業は何でしょうか。その答えを「漁家副業ノ概

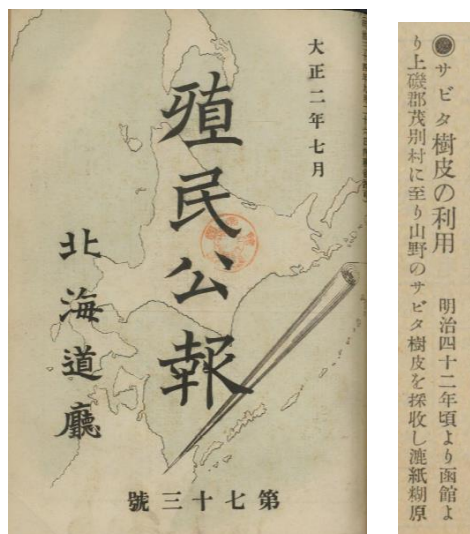


写真-6 殖民公報

（国立国会図書館所蔵）

況 第1次（農商務省水産局 大正5年出版）」に見つけました。北海道の事例として、亀田郡銭亀澤村（現在の函館市役所銭亀沢支所管内）で漁閑期の副業としてノリウツギ樹皮の採取が始まったことが書かれています。

これらの資料から、北海道のノリウツギ樹皮の採取は函館近郊で漁村の副業として始まったことが分かりました。



写真-7 ノリウツギの樹皮から内樹皮を取り分ける作業（左、中）と内樹皮（右）

（撮影場所：標津町 2024年6月末）

広報雑誌「殖民公報」の事例は内樹皮を樽詰めにして出荷する一次産品の商いですが、ほぼ同じ時期に二次産品（樹皮を加工したサビタ糊）を生産する者が現れました。虻田郡長万部村（現・長万部町）に暮らす横田壽吉（じゅきち）です（写真-8）。

壽吉は明治6年（1873）に高知県香美郡夜須町（現・香南市）の横田家の三男として生まれました。横田家は代々製紙業を営んでいました。19歳になった壽吉は同じ土佐出身の実業家「岩崎弥太郎」の生きざまに感化されて、立身出世の志で東京を目指して実家を飛び出します。しかし、東京に着く前に友人に騙されて所持金をすべて失いました。仕方なく郷里に戻り、その出来事を母親に告げると、母親から大いに諭されます。母親の言葉に奮起し、今度は大阪へ向かいます。大阪ではゴム製造所に職を得るものの、にわかに脚気を患い再び郷里へ戻ります。しかし立身出世の思いは止まず再度上京します。いとこの伝手で会社に勤めますが、訳が有って続きませんでした。今回は郷里に戻らず、東京の神田警察署に巡査として働き始めます。その後、勤務先は明治37年に岩見沢警察署へ移り、明治40年に長万部村へ分署長として赴任します。

赴任先、長万部村の原野に自生する豊富なノリウツギに壽吉の目が留まりました（写真-9）。ノリウツギの価値に誰も着眼していないことにも気が付きました。赴任から3年目の明治43年8月、壽吉は職を辞して「サビタ糊」の製造業を興します。思い切りの良さは、郷里土佐のノリウツギ資源の窮地を知っていたからでしょうか。郷里との縁で販路にも目途が立っていたのでしょうか。記録には「本道に於ける「サビタ」製造の嚆矢（こうし）者たり」とあることから、「サビタ糊」製造の第一人者として認識されていたことが分



写真-8 横田壽吉

出典 北海道：開道五十年記念

かります。その後、壽吉はサビタ糊で築いた財を元手にして事業を漁業・米穀・雑貨商へ展開し、長万部村屈指の豪商になりました。

本稿では明治時代の終わりまでを話題にしました。続く大正時代には道内の交通網は更に整備されて、漁村の副業だった樹皮の採取は山間地域へも浸透します。



写真-9 静狩原野（長万部町）に自生するノリウツギ

注：赤枠内はノリウツギの群落（2024年7月撮影）

参考資料

函館市史デジタル版第5章 箱館開港 第12節 鉱業及び工業 製陶／瓦／製紙

http://archives.c.fun.ac.jp/hakodateshishi/tsuusetsu_01/shishi_03-05/shishi_03-05-12-00-05~07.htm

笠井文保（1973）和紙生産の立地とその変遷(3). 農村研究 48:61-67

町田誠之（1983）和紙と日本人の二千年一繊細な感性と卓越した技術力の証明, PHP 研究所

吉井源太（1898）日本製紙論. 有隣堂, 東京

北海道庁（1913）殖民公報（73）: 61-62

北海道庁（1891）北海道移住案内

農商務省水産局（1916）農商務省水産局 編 漁家副業ノ概況 第1次: 227

沢石太・工藤忠平（1918）北海道：開道五十年記念, 鴻文社

梶山清利（1890）北海道樹木志料

佐藤正巳（1954）東北地方の樹木方言(第3報) 山形大学紀要(農学) 第1巻第4号: 315-325

（道北支場）